

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

清沢満之入門

SAMPLE 絶対他力とは何か
Shoshi-Sensei.snsui.com

書肆
心水

清沢
満之
入門

目
次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一部 清沢満之を語る 暁鳥敏著

絶対他力の大道

序

16

一 自己とは他なし

17

二 我等は死せざるべからず

47

三 無限他力いづれのところにかかる

70

四 請うなけれ、求むるなかれ

78

五 何をか修養の方法となす

94

六 独立者はつねに生死巖頭に立在すべきなり

108

清沢先生の信仰

序（沢柳政太郎著）

126

自序

127

例言

130

我が信念

（清沢満之著）

131

第一夜

『我が信念』及び清沢先生の生涯

136

第二夜

清沢先生の地位、及び信念の効果

158

171

第三夜 信念の理由、体相、及び如來の覚体

170

SAMPLE
Shishi-Shinsui.com

智慧円満は我等の理想なり	292	遠美近醜	286	万物一体	281	信するは力なり	277	精神主義と共同作用	275	精神主義と唯心論	268	精神主義と競争	266	精神主義と他力	264	精神主義と三世	270	精神主義と物質的文明	262	精神主義	262	第四夜 現在の幸恵	232
宗教は主観的事実なり	290	本位本分の自覚	286	自由と服従との双運	284															第五夜 無智の安住	218 195		
智慧円満は我等の理想なり	293																			第六夜 道徳以上の平安			

第二部 清沢満之評論選

清沢満之著(暁鳥敏選)

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

実力あるものの態度	296
善惡の思念によれる修養	
迷悶者の安慰	302
客觀主義の弊習を脱却すべし	
日曜日の小説	306
信仰問答	309
天職及び聖職	313
倫理以上の安慰	315
倫理已上の根拠	319
人の怒るを恐るる事	322
他力の救済	328
咯血したる肺病人に与うる書	329
宗教的道徳（俗諦）と普通道徳との交渉	335
我が信念	345
最後の手紙（暁鳥に送られたるもの）	345
第三部　清沢満之先生小伝	349
清沢満之年譜	366
暁鳥敏著	

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

清沢満之入門

絶対他力とは何か

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

一、本書は曉鳥敏が清沢満之を論じたテキストと、曉鳥敏が選出した清沢満之のテキストを集めて一冊にしたものである。使用した元の書籍は次の通り。曉鳥敏著『絶対他力』一九五四年、弘文堂刊行。曉鳥敏著『清沢先生の信仰』一九〇九年、無我山房刊行。曉鳥敏編著『清沢満之の文と人』一九三九年、大東出版社刊行。

一、『絶対他力』と『清沢先生の信仰』は曉鳥敏全集刊行会刊行の『曉鳥敏全集』収録のテキストを使用し、テキストのタイトルも全集版の表記を採用した。

一、第二部の「清沢満之評論選」は曉鳥敏編著『清沢満之の文と人』の「第一篇・研究時代」「第二篇・立信時代」「第三篇・行化時代」のうちの「第三篇」である。巻末の「清沢満之年譜」も『清沢満之の文と人』が収めるものである。

一、本書では新漢字標準字体と現代仮名遣いを使用し、読み仮名ルビを適宜附加した。また送り仮名を現代的に加減した。

一、踊り字（繰り返し記号）は「々」一文字を使用する現今一般的慣例に適う場合のみ使用した。

一、本書刊行所による註記は〔〕で括って表記した。

一、誤読のおそれのある場合に読点を補つた（例、「ごろく」と読む「五六」）。それ以外の句読点づかいは原文のままとした。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向のある左記の語を平仮名表記に置きかえた。送り仮名と活用語尾は代表例。五十音順。

浅間しい（淺ましい）、恰も（あたかも）、強ち（あながち）、有る（ある）、雖も（いえども）、聊か（いささか）、苟も（いやしくも）、愈々（いよいよ）、所謂（いわゆる）、況んや（いわんや）、印度（インド）、於て（おいて）、於ける（おける）、各・各々（おのの）、徐ろ（おもむろ）、却て（かえって）、拘らず（かかわらず）、斯く（かく）、此の如し（かくの如し）、嘗て（かつて）、基督（キリスト）、瓦（グラム）、呉れ（くれ）、可被下（下さるべく）、蓋し（けだし）、此処・是・此・茲（ここ）、悉く（ことごとく）、此の・是の（この）、胡魔化し・誤間化し（こまかし）、此・之・是れ（これ）、有之（これあり）、無之（これなし）、曩に（さきに）、扱（さ

て)、然かく(しかく)、爾し・然し・併し・而し(しかし)、加之(しかのみならず)、而も・然も(しかも)、然る(しかる)、屢々(しばしば)、暫く(しばらく)、頗る(すこぶる)、宛(ずっと)、已に(すでに)、乃ち(すなわち)、須らく(すべからく)、其処(そこ)、其の(その)、抑々(そもそも)、其・夫れ(それ)、丈け(だけ)、齋に(ただに)、忽ち(たちまち)、仮令(たとし)、玉う(たまう)、為(ため)、序で(ついで)、兎あれ角あれ(とあれかくあれ)、何処(どこ)、兎に角(とにかく)、共(助詞)(ども)、兎も角(ともかく)、不取敢(とりあえず)、無い(ない)、乃至(ないし)、猶・尚お(なお)、乍ら(ながら)、勿れ(なかれ)、無し(なし)、為す(なす)、杯(など)、也(なり)、俄に(にわかに)、許り(ばかり)、筈(はず)、窃に(ひそかに)、只管(ひたすら)、可し(べし)、殆んど(ほとんど)、粗・略(ほぼ)、洵に・寃に(まことに)、當に(まさに)、況して(まして)、亦(また)、亦復(またまた)、迄(まで)、儘(まま)、寧ろ(むしろ)、六ヶ敷い(むつかしい)、若し(もし)、齋す(もたらす)、尤も(もつとも)、固(もと)、矢張り(やはり)、稍(やや)、動も(ややも)、漸く(ようやく)、仍て(よつて)

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第一
部

清沢満之を語る

暁鳥敏著

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

絶対他力の
大道

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

序

一昨年の秋の頃、東京教育大学小竹文夫氏から、弘文堂からのもとめで、絶対他力の事を書いた冊子をほしい、という注文をききました。これは私の望むところであるから、容易に返事を致しました。すぐ原稿は出来ておつたが、旅と病気で、その原稿を読み返しすることも、訂正することも出来なかつたのであります。

弘文堂では、はじめ、親鸞聖人のことを書くように、ということでありましたが、近來私は親鸞聖人と清沢先生と頭の中で時々ごっちゃにするのであります。出来上がつたものは、清沢先生の書いた『絶対他力の大道』の究明であります。各節の冒頭に掲げたものはこの『大道』の文章であります。

弘文堂では、それでよろしい、と申されますので、重症の床の中から、この原稿が本になるまでの一切の仕事を毎田周一君に托しました。

弘文堂や毎田周一君のお世話によつて、絶対他力の生々粹を書いたこの書が世に出て、一人でも沢山の人気がこの大道にふれて助かられんことを願うのであります。病床からお世話を下さつた方々に御札を申し上げます。

昭和二十九年〔一九五四年〕三月二十二日夜

金沢大学病院外科病室にて 晓鳥 敏

SAMPLE
Shoshi-Shinpu.com

一 「自己」とは他なし

自己とは他なし、絶対無限の妙用に乘托して、任運に法爾^{ほうに}にこの現前の境遇に落在せるもの即ちこれなり。只それ絶対無限に乗托す、故に死生のことまた憂うるに足らず。死生なおかつ憂うるに足らず、如何にいわんやこれより而下なる事項においてをや。追放可なり、牢獄甘んずべし、誹謗擯斥許多の凌辱あに意に介すべきものあらんや。我等はひたすら絶対無限の我等に賦与せるものを樂しまんかな。

上

『絶対他力の大道』という文章は、清沢先生の往生後に『精神界』へ出たものだと思うていましたら、もっと先に出たものだそうです。『精神界』の本領をいつも先生が書いておられたのですが、何時か先生が暇がなくて多田君が先生の「日記」の中から短文を集めて、それにこの『絶対他力の大道』という題号をつけて『精神界』に出しました。それがこの文章です。『絶対他力の大道』というそういう文を、別に先生が書かれたのではないのであります。この「絶対他力」というようなことは、清沢先生が初めて言わされた事です。親鸞聖人のお言葉にもそんなことはありません。七高僧にもありません、蓮如様にもありません。「絶対他力」というような事は清沢先生が初めておつしゃった。この「絶対他力」というお言葉に、親鸞聖人の御精神における仏法ということの光が輝いておるのであります。

親鸞聖人の教えが徳川の三百年の間に何時の間にやら沈滯して、死んでからお淨土詣りする道のように誤解されて

來た。昨日も放送局のアナウンサーが、「今のインテリは宗教は特権階級の支持によつて保つておるというので、宗教にはあまり関心を持たぬ」というような事でしたが、なるほど徳川三百年間の仏教は、徳川という一つの特権階級の御用をつとめて來たのです。そして政府の命令によつて各宗の寺が国民の精神を耶蘇教にならぬようにしておつた。旅行するにも婚約をするにも、寺が証文を書かねばならん、「キリスト、邪宗門の徒にてはこれなく候」という寺証文がなけれどや旅も出来なんだ。それで坊主が徳川の特権階級の支持を得てこれに従うていた。だから宗教も教育も、その時分の特権階級の徳川の便利なようになっていていた。

それで徳川が没落した時に明治の政府は仏教にとり合わぬようになりました。初めは極端に寺を焼いてしまった。そして全国に、門徒をやめて神社の氏子になれ、というて排仏棄釈をやりました。その時日本の政府が仏教を廃止したのです。寺は焼かれずに残つたけれども、門徒は皆氏子にしてしもうた。日本の皇室でもお内仏がなくなつた。聖徳太子以来『十七条憲法』を戴いて來た皇室が、軍国主義の憲法に變つて、皇室にも仏壇がなくなつた。

だから、各個の家でも政府としては神社の氏子であるけれど、寺の門徒と認めておらないのです。今度戦々に負けてからそれが解けました。今じゃ氏子というような事は忘れています。今度の戦々で氏子という事がなくなつて自由になりました。神社も他の宗教と同様の取扱いを受ける事になつたのです。明治の改革では仏教の門徒を離したが、今度は敗戦で神社の氏子でなくなつた。そんなことはすべて自由になつた。門徒になつておつてもいいし、氏子になつておつてもいい。

そういうわけで明治の時代は無宗教です。特権階級の支配でないところの自由の宗教——信教の自由の中に生まれ出たのが明治の仏教なのです。ですから伝統から一歩出なれりやならぬ時でした。徳川時代は、政府がやつてゆくのだから、宗教にあまり携わつて貰いたくない、ただ耶蘇教を追い出してくれりやいい。あとは未来、後生の事を言わして、あまり現世の事にかかわつて貰いたくない。じやから宗教というのは未来の事というような事に制限して、だんだん追いやつた。坊さんもそれでやつて行つた。

まあ、そういう事でしたが、明治になつたら、宗教の必要という事は未來でなくて、現在に必要であるという事に

なつて來た。現在の苦しみ悩みを解脱する道として宗教が求められるようになつた。今までのようには、現在はどうでもいい唯未来を助けて貰う、お淨土へ詣らせて貰うという事では満足できなくなつた。それで私共が『精神界』を行した時に、「悩みある者は来たれ、苦しみある者は来たれ、我らはその御相談をしよう」という事を新聞に書きました。その悩みある者、苦しみある者というのは、現世の悩み、現世の苦しみです。その苦しみから解脱して、現在の安住を得るという事です。

先生の現在安住というのは、今の救いです。死んでから救いではなくて今の救いです。特權階級の役に立つというのでなく、今の自分の総べての悩み苦しみをなくする、今のお助けです。死んでからお淨土へやつて貰うというような事でなくて、今現在に地獄にある者——「いずれの行及びがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」と言わねばならぬような者が、今の地獄から助かつて今極楽へ行く、というのが清沢先生の仏法です。その言葉がここにあるお言葉なんです。

だから他力という事は、從来の人の他力は相対的の他力ですが、清沢先生は「絶対他力」と言われます。他力といふ事は絶対という事なんです。他力より他に何もない。本願のひとり働きということがありますけれど、徳川時代に何時の間にか、他力というものが相対的になつてしまつて、この世は自力、あの世は他力、とこういう事になつた。今までの真宗のお説教は、死んで未来は親様に任せせるが、この世の事は任せられん、というような事でした。というのは徳川は今の事をかもうて貰いたくない、今の事は武士や役人がやるから坊主は未来の事だけやつておりますといふ事になつてしまつた。それで仏法は現世の日暮しという事と違つた方向へ行つてしまつた。

ところが清沢先生は現在にこれを味わわれた。今の宗教家は、共産主義がどうなつた、自由主義がどうなつた、という事も言うが、昔は坊さんはそんな事を考えぬことにしておつた。私共の御信心は共産主義も民主主義も胸の中へ入れて、それを超えてゆく、今の話です。だから我々のお助けは死んでからでなく、あの世へ行つてからでなく、今助かる。いや助けて貰うという事をあてにするのではなく、助かつておる、今自分が助かつておる、というお助けです。だから感謝は助けて貰える事をお礼を言うのじやなしに、助けて貰つておるという事をお礼を言うのです。そこ

SAMUEL
Shinsuke Shinso.com

まで清沢先生の教えが進んでおるのであります。「無限他力いすれのところにかかる、自分の裏受においてこれを見る」とのお言葉は、清沢先生の「絶対他力」という偉大なる味わいであります。

清沢先生が、明治の世にお出ましにならなければ、親鸞聖人の本願のひとりばたらきとおっしゃった事がはつきりせぬのです。徳川三百年の中にそういう教えが、妙な具合に未来主義になってしまっておつた。それで仏教の力がなくなつた。本当の仏法が力を示すのは今からなんです。昨日の放送討論会で、昭和二十年〔一九四五年〕の八月十五日に天皇陛下が無条件降伏を遊ばされて、その時に天皇の日本が壊れて、同時に暁鳥の日本が生まれ出たんだ、というような話をしたら、随行してくれていた若い人が、「今日の話は随分思い切った話でしたな」と驚いておりました。が、天皇の日本に住んでおつた者が、暁鳥の日本に生まれた。それがいわゆる民主主義です。各自の日本を持つ。ところがそれがまだはつきりせんのです。日本人は、ソ連の日本にしようと思うたり、アメリカの日本にしようと思うたり、モガモガしておる。アメリカの日本にするのでなく、ソ連の日本にするのでなく、日本の日本、暁鳥の日本、そういう道がある、という事が清沢先生の「絶対他力の大道」と仰せられた道なのであります。だから、それを信ずる者は先生と共に「絶対他力の大道」の御教えをくり返し頂きました。各自が各自の国家を建設し、各自の世界を明瞭にしてゆくという事の御相談をしたいと思うのであります。

「自口」とは他なし」と言われる。

曇鸞大師が天親菩薩の著わされました『浄土論』の講義を書かれましたものを、『論註』といいます。この本を書かれますときに、この『浄土論』は仏教の何れの教に属するか、という事をきめるために、竜樹菩薩の『十住毘婆沙論』の「易行品」の中に書いてあることを味わわれ、竜樹菩薩がそこに、

仏教に無量の門あり、世間の道に難あり易あり、陸道の歩行は即ち苦しく、水道の乗船は則ち樂しきが如し。菩薩の道も、またまたかくの如し。

こういうおられると書かれてある。仏教の門には、二つの門がある。一つは陸路の歩行、二つには水道の乗船。陸路を歩くのは辛い、水路の船旅は楽しい。菩薩の道もまたその通りで、難行道は諸々の難行苦行を修して久しううして至る。易行道というは信の方便を以つて直ちに至る。色々の求め方があつて、難行道は長い間修行する。それに比して信心の道は信力で超えてゆく。これが易行。

信心というのはいわゆる水道の船に乗るのです。曇鸞大師は、それからこの『淨土論』はこの二つの中の水道の信力で助かる門であり、淨土に至ることを得るのは、「仏力住持して即ち大乗正定の聚に入る」と言われ、難行道は何故難行なのか、という事を「唯これ自力にして他力の持なし」と言うておられます。自分の相対有限の力でやつておる「我」のお助けですね。そこで『論註』の終りには、弥陀の本願の助けを以つて、自利利他の深義を以つて、弥陀の本願を増上縁として助かると言われました。

仏法では因縁和合という事をいい、新しい物が生まれてくるのは、ヘーゲルのような弁証法的なのではなしに因縁法によるものである、といいます。物が新しく生まれて来る時は、否定によつて生まれて来る、とヘーゲルは考えた。Aが出ると、ノンAが出る、そこでBが出る。これは弁証法的です。仏教では、AにノンAが出ない。A+B=Cという、因縁和合です。夫婦が喧嘩して子が生まれるとはいわぬ、和合して子が生まれる、それが因縁和合です。ヘーゲルの考えになると、夫婦喧嘩して子が生まれる、という事になる。仏教は夫婦が互いに仲良くし合つて子供が生まれる、因と縁とが和合する。阿弥陀仏の本願が縁となり、そして衆生が往生を得る、というのが「増上縁」といわれた意味です。

その阿弥陀仏というものが、自分の他にあると思うておられるのですが、自分の他にあると思うておる間は助からぬ。その阿弥陀仏がわしと違うが、わしがその阿弥陀仏の中にあり、阿弥陀仏がわしの中にある、その阿弥陀といふのは絶対です。清沢先生は、これを「絶対他力」と言わされた。相対有限なものではなしに、「絶対無限」と言われた。絶対とか相対とかは哲学上の言葉ですが、相対は有限なもの、男とか女とか、善とか悪とか、対立的なものです。絶対とは「一」です。

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

第三部

清沢満之先生小伝

暁鳥敏著

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

智慧光の力より

清沢先生あらわれて

日本の國のくまぐまに
法悅の氣ただよえり。

久遠実成阿弥陀仏

愚愛の凡衆をあわれみて

清沢先生としめしてぞ

日本國にぞ應現する。

沢柳政太郎氏はその著『退耕録』に次のように記しておられます。

「明治の文明史上において埋没すべからざる偉人として中村敬宇、福沢諭吉、新島襄を挙ぐることは何人も異存のない所である。予はこれ等の人と匹敵すべき偉人として清沢満之を挙げたいとおもう。清沢氏の生涯は明治二十年〔一八八七年〕に大学を卒え、三十六年〔一九〇三年〕に長逝したる誠に短生涯である。その力を致したる方面も宗教界の一隅に限られて居つた。今日世人の多くは清沢満之なる姓名すらこれを知らないものが多い。しかしながら、氏の我が國の思想界に対する影響は、年と共に増進するであろうと信ずる。今日において氏を以て彼の三偉人と並べ称する甚だ当を得ないと感ずるものが多いとおもうが、今後十年二十年の後には予の言の必ず不当ならざるを事実が証明するであろうとおもう。否、年と共に氏の思想界における勢力は大を加え、益々特別なる地位を氏に捧ぐるの適當なるを認むる時期が到達するとおもう。

三偉人はその徳行の高潔なる、その見識の卓抜なる、その信仰の堅固なる、予の最も敬服する所である。清沢氏はこの三者を兼ねるものにしてしかも深遠なる學問上の基礎を有するに至つては三子者の及ばない所であるとおもう。

SAMPLE
ShowShinsui.com

清沢氏は学問の士であると同時に実行の人であった。故にその遺書として行われるものは敢えて多としないけれども、しかもその已むを得ずして論じ、感じて述べたものも少くない。これ等の遺書は時代を経るに従つて益々その光輝を發揮するに至るとおもう。年と共に氏の思想界に及ぼす勢力は加わるというのは、一つにはこれを指したのである。又中村敬宇先生は不幸にして先生の精神を以て精神とする崇拜者を有することが少ない。福沢翁に至つては、その感化を受けたるもの、今日多く生存し、先生を崇拜するけれども、多くは実業の社会に活動するものであつて、翁の精神を長く後世に伝せんとするものはない。新島先生に至つてもよく先生の信仰を奉じ、先生の人格を仰ぎ、先生の志を成さんとするものに至つては未だその人あるということを聞かない。清沢氏に至つては清沢氏にに対すること、仏祖に対するよりもなお大なる崇敬を表し、清沢氏の志を成さんとして居るものを数多有して居る。佐々木、多田、暁鳥、安藤等の諸氏は何れも小清沢である。その信仰の鞏固なる、その修養を努めて已まない如き清沢氏の弟子たるに恥じない。今や『精神界』なる一雑誌と著述と説教とを以てその信仰その主張を鼓吹するに過ぎないけれども、この勢力たるや将来において極めて大なる結果を見るであろうとおもう。

藤岡作太郎氏の著『国文学史講話』には「明治の哲学、明治の宗教をいうものは、必ず、大西祝と、清沢満之二名を逸すべからず。」と記してあります。

島地大等師は、その著『明治宗教史』（昭和十年〔一九三五年〕十月発行『解放』所載）に次のように記しておられます。

「明治時代の政治家は、凡そ、一種の政治成金であつて、思想問題に対し、これを理解し、批判する資格を有する者はなく、教育家は、唯、教育勅語を機械的に暗誦して、これを児童に口授する程度の能力しか持つていはず、哲学者や、倫理学者は、専ら、歐米の書物の翻訳に没頭して、自家独特的の系統を立てる者は、ほとんどなく、儒教は衰えて居り、神道は無能であり、仏教や、キリスト教は、いわゆる老いたる麒麟で、駒馬にも劣る有様であった。もつとも、仏教にしても、キリスト教にしても、眞面目に、真剣に、骨は折りはしたけれども、自覚が足らず、覺醒が浅かつた。そして、眞に、世道人心を救う上には、それ等は、ほとんど、何等の効果をもたらさなかつたのである。」

「この重大なる危機に当りて、仏教界より頗られたる信仰が二つある。その一つは、精神主義であつて、他は、日蓮主義である。前者は、明治三十年〔一八九七年〕、清沢満之の唱うるところであつて、後者は明治三十四〔一九〇一年〕、高山樗牛の唱うるところであつた。この二個の信念は、明治宗教史上に頗られたる、最も、重要な主義信念であつて、当代における二個の明灯——明らかなる灯——であつたばかりでなく、確かに相当の生命を有する、代表的思想であつた。」

「精神主義は名の示すが如く物質偏重の時代思想に対する名称であつた。満之、これを唱うこと六年にして歿す。その人格と、信念とは、一世を風動し、すこぶる影響するところがあつた。」

「今、直接に、満之、樗牛二人者の主張を見るに、これは共に自我靈性の両面を的説したるものであつて、両者の自証は円妙なる致一を存するものである。但し、前者は、親鸞聖人を標し、後者は日蓮上人を推す。」

清沢満之先生は文久三年六月二十六日名古屋黒門町に生れられた。父上は徳川家の小禄の藩士徳永永則と申さる。母上はタキ子と申し、同じ徳川家の藩士横井甚八氏の長女である。父上には先生御在世の折にも先生御往生の後にもしばしばお目にかかつた。温厚篤実の平凡人であった。しかも我が子を信ずること殊に厚かつた。晩年大浜西方寺に先生の墓近く発句などを楽しんで老後を養うてお出になつた。母上にはおめにからなかつたが、先生の令妹松宮鐘子様より承ると、熱心な真宗の信者で常に聞法につとめられ、はつきりわからぬわからぬと苦にしておられたそうである。先生の信心は、この母上の遺されし形見のように思われる。先生の明治二十年〔一八八七年〕大学を卒業せられる前に東上するとして、まだ四十一歳の母上が剃髪してしまわれた。鐘子様が何故であるかと尋ねられたら、満之の処にゆくのだから、すべて新しくなつてゆきたいから髪を剃つたのだ、と云うておられたそうである。如何に先生に期待をもつておられたかがわかる。先生はよく人を信ずる方であった。その信の源は両親の先生に対する信より発生したとも考えられる。先生は両親に信ぜられ、先輩に信ぜられ、友人に信ぜられ、後輩に信ぜられた方であった。この事は、やがて絶対信の先生に顕現して、その光によつて父母を照し、先生を照し、友人を照し、後輩を照して信心を発起せしめたもうたとも崇められる。

清沢満之年譜 晓鳥敏著

文久三年〔一八六三年〕（一歳）六月二十六日名古屋黒門町に生まれる。幼名満之助。父は愛知県士族徳永永則（十三歳）、母はタキ（二十一歳）という。

元治元年〔一八六四年〕（二歳）今年また妹出生のため、家厳祖母の家に養育せらる。

慶応二年〔一八六六年〕（四歳）四月祖母没し、妹もまた逝きて、父母の膝下に帰る。祖母の教えにより既に百人一首を読誦す。

明治元年〔一八六八年〕（六歳）紙鳶を飛ばす、その技熟して遙かに年長者に優る。

明治二年〔一八六九年〕（七歳）渡辺氏につきて文字を習う。

明治四年〔一八七年〕（九歳）算数を渡辺氏に学び、算木の使用に及ぶ。

明治六年〔一八七三年〕（十一歳）渡辺氏を助けて幼童に算術を教う。

明治七年〔一八七四年〕（十二歳）冬名古屋に英語学校建つ。家厳率先、先生をして入学志願せしむ、学齢不足の故を以て仮入学を許され、半歳の後成績優等を以て本入学となる。

明治九年〔一八七六年〕（十四歳）英語学校廃す。教師英人某先生を愛して、東京へ携行せんという、家厳諾せず。

明治十年〔一八七七年〕（十五歳）医学校学科を改めて和文学校となり、教授ドクトル去る。先生和文を学ぶを喜

ばずして退校、河原氏につきて四書五經を習い、傍らに児童に英語を教う。夏友人小川空思空順兄弟（覚音寺衆徒）京都東本願寺立の育英教校（明治八年立、空順は十年春より在学す）の事を語り、先生に僧となり

てこれに入学せんことを勧む。先生意動き、両親の許可を得て、その冬名古屋別院において楠潛龍師監査の下に英語漢学の試験を受けて及第す。

明治十一年〔一八七八年〕（十六歳）春京都に出で、東本願寺にて得度、法名賢了と称し、観音寺の衆徒となりて、育英教校に入学す。この時七日間に三部經訓の読を習うといふ。先生校舎にありて挙止活潑、閑あれば朗々三経の音誦を稽古す、ためにビショップ（bishop）の名を得たり。

明治十四年〔一八八一年〕（十九歳）本山より東京留学生を命ぜられ、十二月一日同学柳祐久、稻葉昌丸と共に東京に入る。

明治十五年〔一八八二年〕（二十歳）一月臨時試験を受けて及第、大学予備門第二級に編入せらる。予備門長は杉浦重剛氏なり、同級生に岡田良平、一木喜徳郎等、第三級に沢柳政太郎、上田万年等あり。先生の成績常に級中一、二を下らず、英語数学はその最も得意とする所たり。

明治十六年〔一八八三年〕（二十一歳）七月予備門の業を卒え、東京大学文学部へ進入、哲学科専攻。大学総理は加藤弘之氏なり。教授フェノロサ氏につきてヘーベルの哲学を聴く。

明治十七年〔一八八四年〕（二十二歳）九月大学に褒賞給費生の制創設せられ、爾後毎年先生その選に入る。

明治十九年〔一八八六年〕（二十四歳）三月一日大学令公布、東京大学及び工部大学合併せられて帝国大学となり、渡辺洪基氏大学総長に就任。教授ブッセ氏につきてロッツェの哲学を学ぶ。六月二十七日同学柳祐久肺患に罹りて逝く。

明治二十年〔一八八七年〕（二十五歳）七月文科大学哲学科卒業、継ぎて大学院に入り宗教哲学を専攻、兼ねて第一高等学校に仏国史の授業を担当し、哲学館に心理学を講ず。

○この歳 本郷西片町（イの十六号）に一家を僦し、郷里より両親を迎う。

明治二十一年〔一八八八年〕（二十六歳）京都府立尋常中学校は府会において三月限り廃校に決す、知事北垣国道氏の勧誘により本願寺これを継続經營し、大学寮兼学部をこれに合併す、倉卒の際校内動搖止まず、本山終

に先生を招致して校長とし、七月六日就任、擾騒すなわち息む。九月以後真宗大学寮哲学を講ず。

○この時 先生両親を奉じて京都に来たり、居を西三本木に定む。

○冬三河大浜西方寺より夫人清沢ヤス子を迎う。

※「哲学定義集」十月発行『哲学雑誌』第二号所載。

※「因果の理法に論す」『令知会雑誌』所載。

明治二十二年〔一八八九年〕（二十七歳）七月先生の招きにより稻葉昌丸、京都府尋常中学校諭となる。

○三本木より油小路丸太町に転居す。

※「純正哲学」「哲学館講義録」所載。

明治二十三年〔一八九〇年〕（二十八歳）前年より関係せる岡崎学館（大谷派新法主學問所）の組織変更を提議し、

爾來新法主の疾発するまで主任としてその力を尽くす。

○七月中旬の職を稻葉昌丸に譲る、但し大中学の授業は旧の如し。爾來頭顱を円め、僧服を着し、全く旧態を一変す。

※「西方問答」「信願要義」「願生偈」八月宗義につき感得する所ありこの三篇を作る。

明治二十四年〔一八九一年〕（二十九歳）前年來中学の僧侶生を毎月二回高倉講堂に集め、修養談を交換し、名づけて樹心会といふ。二月四日柳祐信喫煙の害を説く。先生即座に禁煙を断行す。

○本山財政窮迫のため学校経費の支出しばしば渋滞す。この秋先生稻葉と共に教学資金を二人にて募集せんことを本山に提議し、折衝を経て遂に容れられず、翌年二月稻葉は中学校長を辞して教諭専務となる。

○十月三日 慈母を喪う。爾來白衣に麻布を纏い、魚肉を斥け、人力車に乗るを廃し、毎朝本山の両堂に詣して後、朝食に就く。この習慣を持続して漸次に禁欲生活に入る。

○冬居を油小路より金座竹屋町に移す、新居の広さ前者二分一に足らず。

明治二十五年〔一八九三年〕（三十歳）先生大谷派の前途を憂えて快々^{おうおう}樂しまず、偶々二月井上豊忠に会し、談

論終日、同感の士を獲たるを喜び、ややその氣を転ず、井上は確信の意見を抱き、執事渥美契縁氏と議論を闘わして後、本山に入りたるものなり。

○大学寮にて松下綱武氏より今世に仙人あるを聞き、書生をして北山を探らしめ、いわゆる行者の生活を研究し、興味を覚えて、鉄鉢を求め、一本歯の高足駄を備う。

※『宗教哲学骸骨』八月京都法藏館発行。四六版百四頁。真宗大学にて前年より授けたる講義の刪底本、九月より再び真宗大学にて『骸骨』により宗教哲学を講ず。

明治二十六年〔一八九三年〕(三十一歳) 沢柳政太郎官を辞して西遊、京都に来る。先生共に賀茂神光院に和田智満師を訪う。

○七月十一日 常盤笠を冠り頭陀囊を懸け、野宿用の手製蚊帳を携え、二人の書生と共に行脚して道誉の門を叩き、伊勢市西来寺に天台宗の高貴上人、山田町川崎に念佛者村田常照氏を訪い、二見浦の仏教青年夏期講習会に列す。その後單身東京に行き、沢柳政太郎を訪うて、京都招聘の事を談じ、留学生月見観了清川円誠に会うて帰る。これこの歳四月京都府立尋常中学校再建せられ、從來の中学校は大谷尋常中学校と改称して、九月授業を開始するにつき、その校長に沢柳を迎へ、併せて教学顧問の名を以て大谷派学制の立案を依頼せんためなり。先生前途に光明を望みて喜び極まりなし。

※宗教哲学骸骨の講義三月終了す。

※『The Skeleton of a Philosophy of Religion』五月京都文港堂発行。四六版七十五頁。アメリカ宗教大会に送らんとて野口善四郎の訳する所、但し本文の訳は先生の手に成り、第一章 Religion を新加す。

※「教育の二針路」五月三河碧海郡教育会講演筆記。

※「思想開発環」七月伊勢二見浦において関西仏教青年会夏期講習会にて講演、十月発行『仏教講話集』所載。

※「黄金世界」八月。

※「教學問題」九節、「宗教の大地」一紙、この二篇二十六年に草する所か。

SAMPLE
ShopShishi.com

明治二十七年（一八九四年）（三十二歳） 一月十五日前法主嚴如上人遷化、二十九日先生その葬儀に参し、風邪に罹りて癒えず、咳嗽頻りなれど、なお授業を廃せず、諸友の勧説により四月下旬笠原光興氏の診断を受け、左肺上葉結核症と判明す、咯血しばしばあり。すなわち大中学の教職を辞し、六月三日妻子三人を伴うて、播州舞子の東隣、西垂水村の海岸に転地療養す。これより先生禁欲生活を固守せず。家嚴は京都に止まり、新鳥丸に転居す。

○七月二日 沢柳顧問等立案に成る大学寮条例、中学寮条例、学階条例、学事商議員規定發布せられ、大谷派の秩序ある学事系統ここに確定し、先生の喜び知るべきなり。九月より大中学寮は新学制により授業を開始す。

○今夏学制大改正の行われたるは渥美執事の英斷によるものなり、しかるに古老者の反動ようやく起こり、執事の意氣頗に碎けて、漸次に旧制に逆転せんとし、沢柳顧問は執事と激論してその感情を害する所あり、偶々十月二十九日中学寮所化三百名同盟休業をなす、執事これを奇貨として以て顧問に当る。沢柳顧問、事の非なるを観て辞表を呈す。

※七月より播州垂水において『保養雑誌』を誌し、三十八年一月に終る。「南無阿弥陀仏」「信仰条目」二十条この二篇二十七年に草する所か。

明治二十八年（一八九五年）（三十三歳） 一月十四日沢柳顧問の辞表裁可、共に事に従いたる今川覚神、稻葉昌丸は依願解職す、ここにおいて学制改革は大頓挫を呈す。先生これを聞きて憤懣捲く能わず、同志に一斉退去を提言す。同志はなお一縷の希望を絶たず、隱忍自重、ただ教授に従事するに決す。

○三月 垂水の海岸より山手の洞養寺に移り、なお療養に力む。咯血しばしばあり、夏に入りて小康。七月一日垂水を引き上げて京都に帰る。

○先生帰来、同志と相談して、七月九日十二名（南条、太田、徳永、村上、稻葉、今川、井上、清川、藤谷、柳藐、姑射、小谷）連署して、寺務改革に関する建言書を本山に提出す。